

文法鑑賞

伊勢物語・大和物語 新解釈

原 国人著

有精堂

文法鑑賞

伊勢物語・大和物語 新 解 釈

原 国人著



有 精 堂

文法鑑賞
伊勢物語・大和物語新解釈

【著者略歴】

昭和18年生まれ。国学院大学卒。
現在東京都立北園高等学校教諭。
〔著書〕『伊勢物語—その世界と成立—』。『小論文・作文・記述式問題の書き方』（共著）ほか。

昭和五十四年五月一日 初版発行

定価六八〇円

著者 原 国 人

発行者 山 崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町一―三九

発行者 有精堂出版株式会社

電話 二九一―一五二一と三
振替口座 東京 九一四〇六八四

（乱丁・落丁本はおとりかえいたしません）

〈検印省略〉

7393—410002—8610

は し が き

日本の物語文学は、二つの源流を持っている。ひとつは、いうまでもなく『竹取物語』に代表される伝奇物語の系統であり、いまひとつが、『伊勢物語』『大和物語』に代表される歌物語の流れである。

本書では、この歌物語の豊かな流れの中から诗情あふるる珠玉の詞章をいくつか選んで解説してある。とりわけ『伊勢物語』は、ばく大な数にのぼる日本の古典文学と称せられる作品群の中でも、数少ない「青春の文学」のひとつであり、思春期から青年期にかけての一時期に読むのに、最適の作品であるといえる。主人公「むかし、男」の一代記の構成をとりながら、友情・親子の愛・主従の愛・男女の愛とその素材・対象はさまざまだが、百二十五段余りの各詞章は、「みやび」の美意識によって、人生の断面を確実にとらえており、人としてのよろこび・悲しみ・苦しみをやさしく説き語ってくれている。また『大和物語』の詞章も、本當の愛の姿を描きとどまるところを知らない。

本書は、高校生・短大生の諸君が古典をどう読み、これから先どうしたら読み続けてくれるか、ということをつたえず念頭に置いて執筆した。日常の学習活動・大学受験などに十分活用して欲しいと願うものである。

なお、本書の成るにあたっては、先学の研究成果に負うところが多いが、紙面の関係もあってその一々の出典を示すことができなかった。御海容を請う次第である。また恩師三谷栄一博士には、ひとかたならぬ御指導を賜った。深く感謝する次第である。

昭和五十四年四月

凡 例

一、本文は、定家本の一本である武田本系統の『伊勢物語』（山田清市編著『伊勢物語・影印本付』昭和四十二年・白帝社刊）の影印より起し、天福本等を参考にし、読みやすいように、漢字・句読点等をあててある。

一、口訳は、原文に忠実で、しかもわかりやすく、丁寧であることを主眼とし、文脈上必要な箇所は（ ）で示し補った。

一、語釈・文法は、理解に必要な範囲に限定したが、基礎的な事項は、特に丁寧に説明しておいた。また文法は通説に従ったが、最近の研究成果も積極的に採用した。

一、設問・研究は、読解・鑑賞のヒントとなる事項を中心に、文法的な事項の訓練になるように設定した。

一、鑑賞・批評は他の類書には見られない、本書の特長を示すもので、設問・研究の解答を含みつつ、さらに作品を理解し、把握する手段として、各詞章の持つ、文芸上の特質・方法について解説したほか、必要な場合には、歴史的な背景や、他の作品との比較を示しておいた。有効に利用して欲しい。

一、巻末に、語釈・文法の項を中心に採録した索引を付けておいた。

一、なお、『伊勢物語』『大和物語』の各章段の収録は、高等学校の教科書に採択されているものを中心に、大学入試等の出題を加味して決定した。

目次

はしがき	一
凡例	二
解説	一
一 伊勢物語	二
書名(一)	成立(二) 作者(三)
内容(四)	文学史的位置(五)
二 大和物語	五
書名(六)	成立(七) 作者(八)
構成・内容(九)	文学史的位置(十)
三 伊勢物語関係年表	七
参考文献	二
四 伊勢物語(二)	大和物語(三)
文法用語の略号表	四
伊勢物語	一
一 初冠(第一段)	九
二 西の京の女(第二段)	三三
三 月やあらぬ(第四段)	三五
四 築地の崩れ(第五段)	二九
五 あくた河(第六段)	三三
六 東下り(第九段)	三三
その一 むかし、男ありけり	三九
その二 ゆきゆきて、駿河の国に	四三
その三 なほゆきゆきて、武蔵の国と	四六
七 たのむの雁(第十段)	四八
八 武蔵野(第十二段)	五一
九 武蔵鑑(第十三段)	五三
十 紀の有常(第十六段)	五九
十一 年ごろ、訪づれざりける人(第十七段)	六三
十二 筒井筒(第二十三段)	六三
その一 むかし、田舎わたらひしける人の	六三
その二 さて、年ごろ経るほどに	六六
その三 まれまれかの高安にきて見れば	六九
十三 梓弓(第二十四段)	七三

十四	さかしらする親(第四十段)……………	七
十五	女はらから(第四十一段)……………	八
十六	行く蟹(第四十五段)……………	八
十七	面影にたつ(第四十六段)……………	九
十八	花たちばな(第六十段)……………	九
十九	つくも髪(第六十三段)……………	九
二十	狩の使(第六十九段)……………	九
	その一 むかし、男ありけり……………	九
	その二 つとめて、いぶかしけれど……………	一〇
二十一	渚の院(第八十二段)……………	一〇
	その一 むかし、惟喬 みよたか の親王と申すみこ……………	二〇
	その二 御供なる人、酒をもたせて……………	二四
	その三 かへりて宮に入らせたまひぬ……………	二七
二十二	小野の雪(第八十三段)……………	二七
	その一 むかし、水無瀬 みなせ に通ひたまひし……………	二〇
	その二 かくしつつまうで仕うまつりけるを……………	二三
二十三	さらぬ別れ(第八十四段)……………	二五
二十四	四十の賀(第九十七段)……………	二六
二十五	あやしき藤の花(第一百一段)……………	二九
二十六	身をしる雨(第一百七段)……………	三三

大和物語

三六	つひにゆく道(第二百二十五段)……………	一四〇
三七	われとひとしき人(第二百二十四段)……………	一三九
一	なごりの藤(第六十一段)……………	一四四
二	生田川 いきたがわ (第四百七段)……………	一四四
	その一 むかし、津の国にすむ女……………	一四七
	その二 かかれば、そのよばひ人どもを……………	一五〇
	その三 かかることどもの昔ありけるを……………	一五四
	その四 さてこの男は、くれ竹のよ長きを……………	一五九
三	蘆刈 あしかり ……………	
	その一 津の国の難波のわたりに……………	一六二
	その二 さしはへいづこともなくて……………	一六六
	その三 さて、とかう女さすらへて……………	一六八
	その四 かかるほどに、この宮仕へする所の……………	一七〇
	その五 難波に祓 はら へして……………	一七三
	その六 かくて、「この蘆の男に……………	一七七
	その七 人、「そこなる家になむ……………	一八〇
	設問・研究の解答……………	一八五
	要語・要項索引……………	一八七
	和歌索引……………	一九二

解 説

九世紀後半から十世紀にかけて、物語文学は成立する。

前代から、知識人の多くは、中国伝来の稗史小説（正史以外の雑文、民間の説話集のようなもの）の類を愛読し、一部の人は、漢文による小作品の創作等を試みるようになった。やがて、仮名文字が発明され広く用いられるようになるとともに、仮名散文によって書き記された物語の製作に、その文学的情熱は向けられていく。藤原氏が台頭し、政治権力を手中に収め、摂関体制が確立されていくにしたがい、後宮が整備され、発展し、文学の享受者層が拡大していくという需要の増加の中で、口承の伝説・説話や唐代伝奇などにその想像力をかきたてられながら、あるいは暗黒の時代をようやく脱し、隆盛の気運あふれる和歌に刺激されながら、虚構としての物語文学の世界がしだいに構築されていくようになった。

こうした発生期の物語は、空想的傾向の強い伝奇物語（『竹取物語』など）と和歌をとりこんだ現実的傾向の強い歌物語の二系列に大別されるが、歌物語は一首ないし数首の歌を中心に、それらの歌の詠まれた事情・経緯が記され、登場人物の感情の頂点にそれらの歌を配して構成される詞章であり、書かれた作品として詞章に定着するまでには、作歌のメモ・反古類の伝来や、その詠歌の事情を語る、歌語りと称される段階があったと考えられており、かなり複雑な成立の様相を示すと同時に、その文学的特質をも基底している。

本書に収められた『伊勢物語』『大和物語』は、この歌物語の代表作であり、後の『源氏物語』をはじめ謡曲などにも計り知れないほどの影響を与えた永遠の古典である。

一 伊 勢 物 語

書 名

この物語、『源氏物語』では、『伊勢物語』（「絵合」巻）とも『在五が物語』（「総角」巻）ともよばれ、『枕草子』には『伊勢の物語』、『狭衣物語』には『在五中将の日記』などと記されている。「在五」というのは、この物語の成立・内容と深い関係のある在原（あり）業平が父阿保親王の五男であったことからつけられた名称ではあるが、本来は『伊勢物語』と称するのが正式の名称であつたらしい。『伊勢物語』という書名の由来については、古くから諸説があり、その代表的なものを次にあげてみると、

- ① 伊勢斎宮さいぐうに関係のあることによる。
- ② 作者が「伊勢」であつたことによる。
- ③ 伊勢の国の物語の意。
- ④ 「妹背」の物語。つまり男・女の間のことが主に書かれているから。
- ⑤ 「似而非物語（あるいは冷笑物語）」の音の訛なまつたもの。

等となるが、現在一番有力視されているのが、①の説である。この説をさらに詳しくみると、一つは、物語の冒頭に伊勢斎宮譚たん（六十九段）がある伝本（「小式部内侍本」）があり、それによるとするもので、いま一つは、この作品の中でもっとも素晴らしい詞章が、伊勢斎宮譚であるので、それに代表させて書名とするものである。前者については、そのような伝本が現存しないために疑問視され、積極的に支持する人はいないが、後者については、確かに、恋愛・結婚を禁じられている斎内親王と狩の使とのうたかたの恋というスリリングな問題を、きわめて物語的な手法（鑑賞・批評欄参照）で描いており、この作品全体を代表させるのにふさ

わしいものといふことができ、説得力を持っているといえよう。なお②の説についていえば、「伊勢」に平安朝の代表的女流歌人の伊勢の御をあてるものと、誰かが「伊勢」なる架空の女性に仮託したものとする説の二つがあるが、伊勢の御に關していえば、成立の項で述べるように、「伊勢物語」は何段階の増益を経て成立しており、そのある段階で、伊勢の御が関与したであろう可能性が指摘されており、また後者については、紀貫之作者説とからませて論じられてもいる。今後の研究のまたれる問題であろう。

成立 現存『伊勢物語』の章段は百二十五段＋アルファであるが、このうちの百余段が『古今和歌集』の成立（八二〇）間もないころに、既に存在していたとする説もあるが、この物語の成立は相当複雑な経過を持っており、現存するようになるまでには、少なくとも三回の大きな増益と数えることのできない小さな増益・編集の手が加えられており、その成長には七十年余り歳月が必要であったとされている。その早いものは、既に『古今和歌集』以前に存在し、主として在原業平の歌を用い、業平実在の時代よりも数十年さかのぼらせた時代設定が用いられており、代表的な詞章として、二・四・五・九段の一部、六十九・八十二段の一部、八十三段の一部、八十四・八十七段の一部、九十九・百七段などが考えられている。次の大きな増益は、『後撰和歌集』の成立（九〇〇）間もないころにあったと考えられ、歌を詠む主人公を翁とした

り、その時代設定を業平実在の時にもっているのが特色で三十数段におよんでいる。それ以降、『源氏物語』成立のすぐそばまで、『伊勢物語』は成長し続けていったと考えられる。そしてこのような増益・成長をなし続けた一つの原因として、享受者がそのまま成長に参加していったであろうということが考えられる。〈後人の補注〉といったかたちの詞章の増加や、『大和物語』百四十七段（一四七ページ）にみるような創造享受のあり方が、それを具体的にうらづけているといえよう。

作者 以上のような成立の過程を認めるとすれば、『伊勢物語』の作者をある特定の個人とすることは論

理的に無理が生じることになるが、現在では、これらの増益・成長の過程をそれぞれの時点で担当した人物として、

① 在原業平とその近親……………従来よりの説

② 源融を頂点する文芸グループ……………渡辺実説

③ 七条の後の文芸サロン（伊勢の御を含む）……………原国人説

④ 紀貫之……………折口信夫・山田清市説

⑤ 源順……………原国人・渡辺実説

等が最近、諸家によってあげられており、『伊勢物語』のある部分の成立にこれらの人物が手をかしたただけは認められてよいように思われる。しかし、この物語を最終的に現在のかたちに仕上げた人物については未詳としかいいようがないのが現実である。

内 容

『伊勢物語』の文学理念は“みやび”であり、“みやび”のありようをさまざまな愛の姿を通して描くのが、この小さな物語の主題であろう。男女の愛・主従の愛・親子の愛、その一つ一つがどれも美しく悲しい。

この物語は、現在に伝わる諸本の全てが「初冠」ではじまり、「つゐにゆく」の辞世の歌で終る一代記風の構成を持っており、「ある男」のさまざまな遍歴がおりなす、人生の場面をしっかりとらえ、読者にさげなく、生き方を教えてくれる。事実この物語は、愛の教科書・人生の教科書として享受されることがしばしばあったらしい。その原因の一つは、この主人公の「むかし、男」のモデルとされる在原業平に対する共感や同情によるものであろう。藤原氏専横の時代の中で、政治的に圧迫され、その憂鬱を文芸作品にむけ、情熱的にうたいあげていく、その「こころ余りて詞足らず」という情念のほとばしりが、あるいは、二条の

后・伊勢斎宮といった高貴な女性と密通するという反逆的な精神・行動に対する同情と共感が、“みやび”の精神の発現としてとらえられ、人々を魅了し、これだけの支持を得ることになったのである。

文学史的位置

『伊勢物語』の影響を受けている作品は数多くあり、その一つ一つをあげる余裕がないほどであるが、どうしても見落せないのが『源氏物語』第一部の構成に与えた影響であり、光源氏に受け継がれていく「色好み」としての主人公の性格であろう。平安末期から中世にかけては、歌人の手本とされ、中世の謡曲『井筒』『杜若』『小塩』などに素材を提供し、『隅田川』の美しい表現は、その大部分を「東下り」によっている。近世に入っては、パロディの文学『仁勢物語』（二四二ページ）を生み、歌舞伎の『井筒業平河内通』などはしばしば上演された。

二 大和物語

書名

『伊勢物語』を意識して、『伊勢物語』が伊勢斎宮譚に代表させた名称を「伊勢の国の物語」と考え、「大和の国の物語」とする説や、作者が「大和」なる人物であったとする説等数多くあるが、いずれも説得力に乏しく、現在は、「大和」を「日本」の意味にとり、中国などの伝奇ではない、「日本の物語」という意味にとるのが妥当とされている。

成立

『大和物語』には、宇多・醍醐朝の廷臣を中心に数多くの人物が登場するが、それらの人物の官職名の表現を基準にしてその成立年代を絞ってゆくと、ほぼ村上天皇の天曆五年（九五）から天曆七年（九七）の間に決定することができ、素材となった物語は個別に、それぞれの時点で、歌語りとして成立していたのであろうが、それらの話が百七十三段の『大和物語』として整理統一されたのがこの期間だとい

うことになる。

作 者

このように成立年代が明確になっているのにもかかわらず、推定の域を出ないのが現状であるが、作者圏として、

①三条右大臣藤原定方・兼輔かねすけを中心とするグループ

②左大臣藤原実頼さねよりの北の方を中心とするグループ

があるが、①はその有力な素材源として、②は全体をまとめたグループとしてそれぞれ有力視されている。

構成・内容

『大和物語』百七十三段は、大きく百四十段と百四十一段の間を境界として第一部と第二部に別れる。第一部は、『古今和歌集』の時代から『後撰和歌集』の時代における現実の人間をえがき、別離・憂き世のあわれ・恋・昇進のままならぬ嘆きを素材とし、現世のつらさが主題となり、冷酷な運命に静かに耐え、悲しみにひたっている様子が描かれる。一方、第二部は、そうした一部の人々の心をとらえてはなさない、昔の、純愛に生きた清純な人間の姿が、伝説の中からよびさまされて浪漫的に描かれている。

文学史的位置

『伊勢物語』の強い影響を受けた作品であるが、その文体・構成などは、歌語りの状態をそのまま詞章に写したようなところがあり、『伊勢物語』よりも古拙・生硬な感じがする。しかし、内容が当代の人物のエピソードを数多く伝えているため、中世の歌人などに資料として用いられ、『今昔物語集』などに見られる歌説話の原流となった。

三 伊勢物語関係年表

○印―業平の生涯に関する事項
 △▽―『伊勢物語』の章段
 (三実)―『日本三代実録』

天皇	年号	西紀	業平 年齢	事	項	参考事項
淳和	天長二	八二五	1	○業平誕生。		
仁明	三	八二六	2	○在原朝臣の姓を賜う。		
	一〇	八三三	9	三月六日、仁明天皇即位。		
承和	二	八三五	11			
	五	八三八	14			
	七	八四〇	16	五月八日、淳和上皇崩。五十五歳。		
	八	八四一	17	○一月、右近衛將監。		
	九	八四二	18	六月十五日、嵯峨上皇崩。五十七歳。		
			19	十月二十二日、阿保親王薨。五十一歳。		
			20	高子(二条の後)誕生。		
			21	惟喬親王誕生。		
			22	○左近衛將監。		
			23	○一月七日、藏人。		
嘉祥	一四	八四五	24	五月十五日、崇子内親王薨。△三十九段▽		
	元	八四八	25	八月、安祥寺建立。		
	二	八四九		○一月七日、從五位下。△一段(初冠叙辭説)▽		
	三	八五〇	26	三月二十五日、惟仁親王(清和)誕生。		
				三月二十一日、仁明天皇崩。四十一歳。		

七月、承和の変。伴健岑・橘逸勢ら反乱を企て、阿保親王の密告により捕えられて流罪。以後良房の権力強まる。

三月二十六日、興福寺の僧、仁明天皇宝算四十を賀し大長歌を奉る。

貞観一〇	一一	八六八	44	十二月十六日、藤原常行右近衛大将。	八月十四日、『統日本後紀』 (藤原良房ら)成る。
	一二	八七〇	45	十二月二十七日、高子(二条の后)清和天皇女御となる。	
一三	一三	八七一	46	二十五歳。	十二月十一日、渤海の使、加賀国に到着。
	一四	八七二	47	十二月十六日、貞明親王(陽成)誕生。	
一四	一四	八七二	48	二月、敏行大内記(一貞観十三年一月まで)。	一月、京に咳逆病流行。死者多し。
	一四	八七二	48	九月二十八日、五条の后(順子)崩。	
一四	一四	八七二	48	十月八日、賀陽親王薨。七十八歳。	七月十一日、惟喬親王出家。
	一四	八七二	48	五月五日、人康親王薨。	
一四	一四	八七二	48	〇五月十七日、遣わされて渤海の使を鴻臚館に勞問する(三夷)。	二十九歳。八十三段
	一四	八七二	48	七月十一日、惟喬親王出家。	
一五	一五	八七三	49	二十九歳。八十三段	〔寛平九(六七)年二月二十日、惟喬親王薨。五十四歳〕
	一五	八七三	49	八月二十五日、源融左大臣(八十一段)、藤原基経右大臣。	
一六	一六	八七四	50	九月二日、藤原良房薨。六十九歳。	〇一月七日、藤原基経摂政。
	一六	八七四	50	十一月二十九日、藤原基経摂政。	
一七	一七	八七五	51	〇一月七日、從四位下。	藤原良近左中弁。(百一段)
	一七	八七五	51	〇一月十三日、右近衛權中將。	
一七	一七	八七五	51	二月十七日、藤原常行薨。	〇贈從二位の勅使として常行邸に赴く。
	一七	八七五	51	藤原基経四十の賀。(九十七段)	

應天門事件に関し伴善男流罪。

光孝				陽成	
仁和 二	八 五	八 八 一	四 三	元 慶 元	一 八
八 八 六	八 八 四	八 八 一	八 七 九 八 八 〇	八 七 七	八 七 六
			56 55	53	52
九月九日、藤原良近卒。 五十三歳。貞數親王誕生。へ七十九段 讓位。十一月二十九日、貞明親王（陽成）受禪。九歳。 〇十二月二十九日、受讓奉告使として田邑山陵に遣わされる（三実）。 恬子内親王齋宮退下。 一月三日、陽成天皇即位。 一月二十三日、紀有常卒（從四位下、周防權守。六十三歳）。へ十六段 高子（二条の後）中宮となる。 〇十一月二十一日、從四位上。 〇一月三日、源融の上表に対する編旨伝達の勅使として遣わされる（三実）。 〇一月十一日、相模權守、權中將はもとのまま。後に美濃權守。 〇十月十一日、藏人頭。 〇五月二十八日、卒（三実）從四位上行右近衛權中將兼美濃權守。へ百二十五段 十二月四日、基經太政大臣。 同日、清和上皇崩。三十一歳。				九月九日、藤原良近卒。 五十三歳。貞數親王誕生。へ七十九段 讓位。十一月二十九日、貞明親王（陽成）受禪。九歳。 〇十二月二十九日、受讓奉告使として田邑山陵に遣わされる（三実）。 恬子内親王齋宮退下。 一月三日、陽成天皇即位。 一月二十三日、紀有常卒（從四位下、周防權守。六十三歳）。へ十六段 高子（二条の後）中宮となる。 〇十一月二十一日、從四位上。 〇一月三日、源融の上表に対する編旨伝達の勅使として遣わされる（三実）。 〇一月十一日、相模權守、權中將はもとのまま。後に美濃權守。 〇十月十一日、藏人頭。 〇五月二十八日、卒（三実）從四位上行右近衛權中將兼美濃權守。へ百二十五段 十二月四日、基經太政大臣。 同日、清和上皇崩。三十一歳。	
讓位。二月五日、時康親王（光孝）受禪。五十五歳。 二月二十三日、光孝天皇即位。 十二月十四日、芹河行幸。へ百十四段				十一月十三日、『文德実録』 （藤原基經ら）成る。 行平。授学院を創立。	